

指数関数の有理点での値の有理近似について

慶應・理工 塩川 宇賀 (Iekata Shiokawa)

1. はじめに表題に関して知られている主な結果を紹介しよう。

定理1. (Davis [5]) 任意の正数 ε に対し不等式

$$\left| e - \frac{p}{q} \right| < \left(\frac{1}{2} + \varepsilon \right) \frac{1}{q^2} \frac{\log \log q}{\log q}$$

は無限個の整数解 $q (> 0), p$ をもつ。さらに定数 $q_0 = q_0(\varepsilon)$ が存在して、不等式

$$\left| e - \frac{p}{q} \right| > \left(\frac{1}{2} - \varepsilon \right) \frac{1}{q^2} \frac{\log \log q}{\log q}$$

がすべての整数 $q (\geq q_0), p$ に対し成り立つ。

定理2. (Bundschuh [3], cf. Mahler [9], Durand [6]) 整数 $a (> 0), b$ に対し正の定数 $c = c(a, b)$ が存在して、

不等式
$$\left| e^{a/b} - \frac{p}{q} \right| > \frac{c}{q^2 + 4 \log a / \log \log q} \frac{\log \log q}{\log q}$$

がすべての整数 $q (\geq 3), p$ に対し成り立つ。

定理3. (Durand [7]) 相異なる 0 でない n 個の有理数 $\alpha_1, \dots, \alpha_n$ に対し、正の定数 $C = C(n, \alpha_1, \dots, \alpha_n)$ が存在して、不等式

$$|g_0 + g_1 e^{\alpha_1} + \dots + g_n e^{\alpha_n}| > g^{-n - C/\log \log g}$$

がすべての整数の組 $(g_0, g_1, \dots, g_n) \neq (0, 0, \dots, 0)$ に対して成り立つ。但し、 $g = \max(1g_1, 1g_2, \dots, 1g_n, 3)$ 。

定理4. (Baker [1], [2; chap. 10], Mahler [10])
相異なる 0 でない有理数 $\alpha_1, \alpha_2, \dots, \alpha_n$ に対し 正の定数 $C = C(n, \alpha_1, \dots, \alpha_n)$ が存在して、不等式

$$|g e^{\alpha_1} - p_1| \cdot |g e^{\alpha_2} - p_2| \cdots |g e^{\alpha_n} - p_n| > g^{-1 - C/\sqrt{\log \log g}}$$

がすべての整数 $g (\geq 3), p_1, p_2, \dots, p_n$ に対し成り立つ。

注意、定数 C はいずれも explicit に与えられている。
定理1の g_0 も計算可能である。

2. 証明の方法について述べよう。Mahler, Durand の証明は Hermite の方法による。 m, n をパラメタとし、多項式

$$f(t) = \frac{t^m (t-1)^n}{m! n!}$$

を考える。

$$f(z; t) = \sum_{k=0}^{\infty} z^{-k-1} f^{(k)}(t)$$

とおくと、部分積分により

$$f(z; 0)e^z - f(z; 1) = e^z \int_0^1 f(t)e^{-zt} dt$$

を得る。両辺に $(m+1)! z^{m+n+1}$ をかけてそれを

$$(1) \quad Q(z)e^z - P(z) = R(z)$$

とおく。(これがいわゆる Hermite's identity である。Hermite は類似の多項式から出発し (1) を用いてその超越性を証明した。) 定義より $Q(z), P(z) \in \mathbb{Z}[z]$, $\deg Q = n$, $\deg P = m$, $R(z)$ の $z=0$ での order = $m+n+1$ がわかる。 $z=z'$, パラメタ (m, n) をそれぞれ $(n-1, n)$ または $(n, n-1)$ と選び、対応する P, Q, R をそれぞれ P_n, Q_n, R_n または P_n^*, Q_n^*, R_n^* と書く。すると degree & order の比較から

$$(2) \quad \det \begin{pmatrix} P_n(z) & Q_n(z) \\ P_n^*(z) & Q_n^*(z) \end{pmatrix} \neq 0 \quad (\forall z \neq 0)$$

がわかる。 $z = a/b$ ($a, b \in \mathbb{N}$) を代入する。 $P_n(a/b)$, $Q_n(a/b)$, $P_n^*(a/b)$, $Q_n^*(a/b)$ をそれぞれ p_n, q_n, p_n^*, q_n^*

とおく。これらの有理数の共通分母は $d_n := b^n / (n-1)!$ である。

さて、 $p, q (> 0)$ を与えられた整数とする。 $(2) \Leftrightarrow$ 任意の n に対して $p_n q - q_n p \neq 0$ または $p_n^* q - q_n^* p \neq 0$ 。
各 n に対して $\neq 0$ となる p_n, q_n または p_n^*, q_n^* を選び、それを改めて、 p_n, q_n と書く。 $(1) \Leftrightarrow$

$$d_n q_n e^{a/b} - d_n p_n = d_n R_n(a/b)$$

故に $d_n(q_n p - p_n q) = (q e^{a/b} - p) d_n q_n - q d_n R_n(a/b)$

左辺 $\in \mathbb{Z}, \neq 0$. さて、

$$|(q e^{a/b} - p) d_n q_n - q d_n R_n(a/b)| \geq 1$$

従って

$$(3) \quad |q d_n R_n(a/b)| \leq \frac{1}{2}$$

たるは

$$|(q e^{a/b} - p) d_n q_n| \geq \frac{1}{2}$$

$$\text{i.e. } |e^{a/b} - \frac{p}{q}| \geq \frac{1}{2} q^{-1 - \log |d_n q_n| / \log q}$$

$q_n, R_n(a/b)$ の大きさ(小ささ)は正確にわかっている。

そこで(3)をみたす n を選び、 $d_n q_n$ を q の関数として、上から評価する事ができる。

Davis & Hermite の証明から idea を得ていて。 $f(t)$ を
多項式とすると、

$$\int_0^\infty e^{-t} f(t) dt = \int_0^1 e^{-t} f(t) dt + e^{-1} \int_0^\infty e^{-t} f(t+1) dt$$

これを $g = u + e^{-1}p$ と書くと、

$$e - \frac{p}{g} = \frac{u}{g^2}, \quad \text{但し } u = eug.$$

いま $f(t)$ として次の多項式 $f_n(t)$ ($n \geq 0$) をとる。

$$f_{3n-2}(t) = \frac{t^n(t-1)^n}{n!}, \quad f_{3n-1}(t) = \frac{t^n(t-1)^{n+1}}{n!}, \quad f_{3n}(t) = \frac{t^{n+1}(t-1)^n}{n!}$$

対応する p, g, u を p_n, g_n, u_n と書くと

$$p_n, g_n \in \mathbb{Z}, \quad e - \frac{p_n}{g_n} = \frac{u_n}{g_n^2},$$

かつ次の回帰関係をみたす。

$$g_{3n} = g_{3n} + g_{3n-2}, \quad g_{3n-1} = 2n g_{3n-2} + g_{3n-3}, \quad g_{3n-2} = g_{3n-3} + g_{3n-4}$$

(p_n も同様) これは(1)の正則連分数展開

$$e = [2; 1, 2, 1, 1, 4, 1, 1, 6, 1, 1, 8, 1, 1, \dots]$$

が得られる。 p_n/g_n はそのオル近似分数であり、 g_n の大きさは計算できる。正則連分数が最良近似を与える事から、定理 1 が証明される。

Bundschuh は合流型超幾何関数に対する Kummer の
変換公式

$${}_1F_1(\alpha; \beta; z) = e^z {}_1F_1(\beta - \alpha; \beta; -z)$$

を用いて e^z の有理関数近似を構成している。実際これは、
 e^z の Padé table (Perron [11; § 75] 参照) の主対角線
に一致している。彼は同じ方法で $\tanh z$ と Bessel 関数
の比 $J_\nu(z) / J_{\nu+1}(z)$ の有理表での値を扱っている。
(cf [4].)

Hermite の方法の最も重要な改良は Siegel E 関数の理
論である。Baker-Mahler の結果はこれによる。

定理 4において $\sqrt{\log \log f}$ を $\log \log f$ に置きかえる事が
残されている。同じ方法で Shidlovskii, Sprindzuhuks,
Galochkin 等が e^z を含む超幾何 E 関数に対して, § 1
と同種の結果を得ている。

3. 本論文において定理 2 の第 3 の証明を与えよう。前々
の証明では、まず e^z の有理関数近似を構成し、 $z = a/b$ と
おいて、その値の有理数近似を導いた。そこで能率の良い関
数近似 - Padé 近似 - が必要となる。“良い関数近似 \Rightarrow

良い有理数近似”といふ固式である。我々の証明は Gauss による合流型超幾何関数の連分数展開にもとづく。即ち連分数のオル近似分数 $p_n(z)/q_n(z)$ という既製の有理数近似を用いる。それ故証明は単純明快で $e^z, \tan z, \tanh z, J_\nu(z)/J_{\nu+1}(z)$ etc を含む広いクラスの合流型超幾何関数の有理数値が一遍に扱える。もちろん得られる定数は計算可能である。

補題 1 関数

$$Y = F(X) := X \log X + \lambda X \quad (\lambda \text{ は実定数})$$

の逆関数 $X = F^{-1}(Y)$ は、 X, Y が十分大きい所で次の級数に展開される。

$$X = F^{-1}(Y) = \frac{Y}{\log Y} \left\{ 1 + \sum_{n=1}^{\infty} \sum_{k=0}^{n-1} A_{n,k} \frac{(\log \log Y - \lambda)^{n-k}}{(\log Y)^n} \right\}$$

ここで $A_{n,k}$ は次の関係式で帰納的に定義される。

$$A_{n,0} = 1 \quad (n \geq 0), \quad A_{n,n-1} = (-1)^{n-1} \quad (n \geq 1)$$

$$A_{n+1,k+1} = A_{n,k+1} - \sum_{\substack{n_1+n_2=n \\ k_1+k_2=k \\ 0 \leq k_i \leq n_i}} A_{n_1,k_1} B_{n_2,k_2}$$

$$(n \geq 1, 0 \leq k \leq n-1)$$

但し、
 $B_{n,k} = \sum_{j=1}^n \frac{(-1)^{j-1}}{j} \sum_{\substack{n_1 + \dots + n_j = n \\ k_1 + \dots + k_j = k \\ n_i \geq 1, 0 \leq k_i \leq n_i}} A_{n_1, k_1} \dots A_{n_j, k_j} \quad (n \geq 1, k \geq 0)$

はじめの数項を書けば、

$$X = F^{-1}(Y) = \frac{Y}{\log Y} \left\{ 1 + \frac{\log \log Y - \lambda}{\log Y} + \frac{(\log \log Y - \lambda)^2}{(\log Y)^2} \frac{\log \log Y - \lambda}{(\log Y)^2} \right.$$

$$\left. + \frac{(\log \log Y - \lambda)^3}{(\log Y)^3} - \frac{5}{2} \frac{(\log \log Y - \lambda)^2}{(\log Y)^3} + \frac{\log \log Y - \lambda}{(\log Y)^3} + \frac{(\log \log Y - \lambda)^4}{(\log Y)^4} \dots \right\}$$

証明省略

定理 整数 $a (> 0), b$ に対して、正の定数 $C = C(a, b)$ が

存在して不等式

$$\left| e^{a/b} - \frac{p}{q} \right| > \frac{C}{q^{2+2\log a \cdot v(q)}} \frac{\log \log q}{\log q}, \quad v(q) := \frac{F^{-1}(\log q)}{\log q}.$$

がすべての整数 $P, q (\geq 3)$ に対して成り立つ。

系 整数 $a (> 0), b$ に対して、正の定数 $C = C(a, b)$ が存在し、

$$\left| e^{a/b} - \frac{p}{q} \right| > C q^{-2-2\log a \cdot (1/\log \log q + \log \log \log q / (\log \log q)^2)}$$

がすべての整数 $P, q (\geq 3)$ に対して成り立つ。

C の下からの評価は可能であるが、相当小さくなる。

4. Gauss は Euler, Lambert, Lagrange 等の連分数を一般化して超幾何関数の連分数展開を得た。これを合流型超幾何関数

$$\Phi(\beta; r; z) := 1 + \frac{\beta}{r} \frac{z}{1} + \frac{\beta(\beta+1)}{r(r+1)} \frac{z^2}{2!} + \frac{\beta(\beta+1)(\beta+2)}{r(r+1)(r+2)} \frac{z^3}{3!} + \dots$$

($\beta, r \in \mathbb{C}$ は定数, $r \notin \{0, -1, -2, \dots\}$) に限定して述べよう。

Φ は entire で, Kummer の関数と呼ばれ, しばしば ${}_1F_1(\beta; r; z)$ と表示される。これは Kummer の方程式 $zd^2w/dz^2 + (r-z)dw/dz - \beta z = 0$ をみたす。いま $n \geq 0$ に対し $P_{2n} := \Phi(\beta+n; r+2n; z)$, $P_{2n+1} := \Phi(\beta+n+1; r+2n+1; z)$ とおくと, P_n は次の3項回帰関係をみたす;

$$P_n = P_{n+1} + a_{n+1} z P_{n+2} \quad (n \geq 0)$$

但し

$$a_{2n} = \frac{\beta+n}{(r+2\beta-1)(r+2n)}, \quad a_{2n+1} = -\frac{r-\beta+n}{(r+2n)(r+2n+1)}.$$

これより形式的に連分数

$$\frac{\Phi(\beta; r; z)}{\Phi(\beta+1; r+1; z)} = \frac{P_0}{P_1} = 1 + \frac{a_1 z}{P_1/P_2} = \dots = 1 + \frac{a_1 z}{1} + \frac{a_2 z}{1} + \dots$$

が得られる。この連分数は左辺の関数の poles を含まない任意の compact set 上で一様収束する事が分かる。特に $\beta=0$, $r+1$ を r でおきかえると

$$\Phi(1; r; z) = \frac{1}{1} + \frac{z}{r} + \frac{1 \cdot z}{r+1} - \frac{r \cdot z}{r+2} + \frac{2 \cdot z}{r+3} - \frac{(r+1)z}{r+4} + \frac{3z}{r+5} - \dots$$

さらには $r=1$ とすれば e^z も連分数

$$e^z = \Phi(1; 1; z) = \frac{1}{1} - \frac{z}{1} + \frac{z}{2} - \frac{z}{3} + \frac{2z}{4} - \frac{2z}{5} + \frac{3z}{6} - \frac{3z}{7} + \dots$$

に展開される。ここで連分数の変形公式

$$(1) b_0 + \frac{a_1}{b_1} + \frac{a_2}{b_2} + \dots = b_0 + \frac{r_1 a_1}{r_1 b_1} + \frac{r_1 r_2 a_2}{r_2 b_2} + \frac{r_2 r_3 a_3}{r_3 b_3} + \dots$$

を用いれば

$$(2) e^z = \frac{1}{1} + \frac{-z}{1} + \frac{z}{2} + \frac{-z}{3} + \frac{z}{2} + \frac{-z}{5} + \frac{z}{2} + \frac{-z}{7} + \dots$$

この形では扱いにくいのでもう少し“加速”する。一般に
2つの連分数

$$b_0^* + \frac{a_1^*}{b_1^*} + \frac{a_2^*}{b_2^*} + \dots, \quad b_0 + \frac{a_1}{b_1} + \frac{a_2}{b_2} + \dots$$

がある、それらのオーバル近似分数 f_n^* , f_n の間に

$$f_n^* = f_{2n+1} \quad (n \geq 0)$$

の関係があるとき、前者は後者の odd part であるといふ。

補題 連分数 $b_0 + \frac{a_1}{b_1} + \frac{a_2}{b_2} + \dots$ が odd part をもつ必要十分条件は $b_{2k+1} \neq 0$ ($k \geq 0$)。この時、odd part

$b_0^* + \frac{a_1^*}{b_1^*} + \frac{a_2^*}{b_2^*} + \dots$ は次の式で与えられる;

$$b_0^* = (a_1 + b_0 b_1) / b_1, \quad a_1^* = -a_1 a_2 b_3 / b_1, \quad b_1^* = a_2 b_3 + b_1 (a_3 + b_2 b_3),$$

$$a_k^* = -a_{2k-1} a_{2k} b_{2k-3} b_{2k+1}, \quad b_k^* = a_{2k} b_{2k+1} + b_{2k-1} (a_{2k+1} + b_{2k} b_{2k+1}).$$

この補題により (2) の odd part をとり (1) で変形すれば

$$(2) e^z = 1 + \frac{z}{2-z} + \frac{z^2}{2 \cdot 3} + \frac{z^2}{2 \cdot 5} + \frac{z^2}{2 \cdot 7} + \dots + \frac{z^2}{2(2n-1)} + \dots$$

を得る。さらに変形公式

$$b_0 + \frac{a_1}{b_1} + \frac{a_2}{b_2} + \dots = b_0 + \frac{1}{\frac{1}{a_1} b_1} + \frac{1}{\frac{a_1}{a_2} b_2} + \frac{1}{\frac{a_2}{a_3} b_3} + \frac{1}{\frac{a_1 a_3}{a_2 a_4} b_4} + \dots$$

を用いて正則連分数に直せば

$$(*) \left\{ \begin{array}{l} e^z = 1 + \frac{1}{a_1} + \frac{1}{a_2} + \dots \\ a_1 = \frac{2-z}{2z}, \quad a_{2n} = \frac{4(4n-1)}{z}, \quad a_{2n+1} = \frac{4n+1}{z} \quad (n \geq 1) \end{array} \right.$$

を得る。

つぎに $\Psi(\beta; \gamma; z)$ において, z を z/β におきかえ
 $\beta \rightarrow +\infty$ とすると, 合流型超幾何関数

$$\Psi(\gamma; z) = 1 + \frac{1}{r} \frac{z}{1} + \frac{1}{r(r+1)} \frac{z^2}{2!} + \frac{1}{r(r+1)(r+2)} \frac{z^3}{3!} + \dots$$

及び連分数展開

$$\frac{\Psi(r; z)}{\Psi(r+1; z)} = 1 + \frac{z}{1} + \frac{z}{(r+1)(r+2)} + \frac{z}{(r+2)(r+3)}$$

を得る。今度は $(2) \rightarrow (2')$ への変形は必要なく、このままで良い。 $\tan z$, $\tanh z$, $J_\nu(z)/J_{\nu+1}(z)$ などはこの形の連分数である。

以上連分数に関しては, Perron [11], Wall [12], Jones-Thron [8] を参照してほしい。但し [8] の (2.4.30) 式にはミスがある。上記 $(2')$ が正しい。

5. 定理の証明

補題 2. 連分数

$$a_0 + \frac{1}{a_1} + \frac{1}{a_2} + \dots \quad (a_n \text{ 複素数})$$

において

$$\sum_{n=1}^{\infty} |a_n a_{n+1}|^{-1} < +\infty.$$

とすると

(i) 比 $p_n/(a_2 a_3 \cdots a_n)$, $q_n/(a_1 a_2 \cdots a_n)$ はそれぞれ 0 でない有限値に収束する。

$$(ii) \alpha_n = \frac{1}{a_{n+1}} + \frac{1}{a_{n+2}} + \dots \text{ とおくと, } |\alpha_n| \sim |a_{n+1}|^{-1}.$$

証明省略

定理の証明は連分数(*)にもとづく。(*)に $z = a/b$ を代入すると、オル近似分数 p_n/q_n において, $p_n, q_n \in \mathbb{Q}$ 。いま

$$(1) \quad d_n = 2a^n$$

とおくと、帰納法により

$$d_n p_n, d_n q_n \in \mathbb{Z} \quad (n \geq 1)$$

がいえる。(*)は補題2の条件をみたすから、 n_0 を十分大きく選べば、

$$(2) \quad \begin{cases} |q_n| < |q_{n+1}|, |q_n/d_n| < |q_{n+1}/d_{n+1}| \\ |a_n| > 1, |d_n| < 1/2 \end{cases} \quad (n \geq n_0)$$

と出来る。さて $P, Q (> 0)$ を与えられた整数とする。

$$|q_{n_0}/d_{n_0}| < 48$$

と仮定してよい。(そうでないものは有限個しかないから。)

すると(2)より

$$(3) \quad |q_{n-1}/d_{n-1}| \leq 48 < |q_n/d_n|$$

をみたす $n = n(Q) > n_0$ が唯一つ定まる。

連分数の公式

$$P_n q_{n-1} - P_{n-1} q_n = \pm 1$$

より $P_n Q - Q_n P \neq 0$ または $P_{n-1} Q - Q_{n-1} P \neq 0$ の少なくとも一方が成り立つ。

いま $P_n Q - Q_n P \neq 0$ とすると、

$$d_n q_n \left(e^{\frac{a}{q}} - \frac{P}{q} \right) = \frac{d_n (P_n q - q_n P)}{q} + d_n (q_n \alpha - P_n)$$

ここで

$$d_n (P_n q - q_n P) \in \mathbb{Z}, \neq 0, \quad \text{即ち}$$

$$|d_n (P_n q - q_n P)| \geq 1.$$

また連分数の公式

$$q_n \alpha - P_n = \pm \frac{1}{q_{n+1} + d_{n+1} q_n}$$

と(2),(3)より

$$|d_n (q_n e^{\frac{a}{q}} - P_n)| \leq \frac{2 d_n}{|q_{n+1}|} \leq \frac{1}{2q}.$$

$$\text{よって} \quad |d_n q_n \left(e^{\frac{a}{q}} - \frac{P}{q} \right)| \geq \frac{1}{2q}$$

$$\text{故に} \quad \left| e^{\frac{a}{q}} - \frac{P}{q} \right| > \frac{1}{2} q^{-1 - \log |d_n q_n| / \log q}$$

$P_{n-1}q - q_{n-1}P \neq 0$ からも同じ不等式が得られる。ここで(1),

(2)より

$$\begin{aligned} \log |d_n q_n| &\leq \log |q_{n-1}/d_{n-1}| + 2 \log |d_n d_{n-1}| + \log |q_n/q_{n-1}| \\ &\leq \log q + 2n \log a + \log n + B. \end{aligned}$$

(以後同じ文字Bで適当な正の定数を表わす。Bおよび0

定数は高々a, bにのみ依存する。) よって

$$(4) \quad \left| e^{\frac{a}{q}} - \frac{P}{q} \right| > B q^{-2 - (2n \log a + \log n) / \log q}$$

あとは $n=n(q)$ をqの関数として explicitに表わせばよ

い。 (*) より

$$a_1 a_2 \cdots a_{2m+1} = \frac{2-z}{8} \left(\frac{8}{z} \right)^{2m+1} (m!)^2 \prod_{k=1}^m \left(1 - \frac{1}{16k^2} \right)$$

$$\log |a_1 a_2 \cdots a_{2m+1}| = 2 \log m! + (2m+1) \log (8/|z|) + O(1)$$

$$\begin{aligned} \log |a_1 a_2 \cdots a_{2m}| &= \log |a_1 a_2 \cdots a_{2m+1}| - \log |a_{2m+1}| \\ &= 2 \log m! + 2m \log (8/|z|) - \log (2m) + O(1) \end{aligned}$$

より Stirling の公式

$$\log m! = m \log m - m + \frac{1}{2} \log m + O(1)$$

および補題 2 より

$$\log |g_n| = n \log n + n \log \frac{4}{|z|e} + O(1)$$

故に (1), (3) より

$$(5) \quad \log g + B < n \log n + \lambda n = F(n) < \log g + B'$$

$$\text{但し } \lambda = 2 \log 2 - 1 + \log |b| - 2 \log a.$$

特に

$$(6) \quad \log n = \log \log g - \log \log \log g + O(1).$$

また平均値の定理を用いて

$$F^{-1}(Y + O(\log Y)) = F^{-1}(Y) + O(1)$$

より (5), (6) から

$$(7) \quad n = F^{-1}(\log g) + O(1)$$

(4), (6), (7) および補題 1 より定理と系が従う。

References

- [1] A. Baker: On some Diophantine inequalities involving the exponential function. Canad. J. Math. 17(1965), 616-626
- [2] A. Baker: Transcendental Number Theory. Cambridge Univ. Press, Cambridge, 1975
- [3] P. Bundschuh: Irrationalitätsmasse für e^a , $a \neq 0$ rational oder Liouville-Zahl. Math. Ann. 192(1971), 229-242
- [4] P. Bundschuh: Scharfe Irrationalitätsmasse für Zahlen, die mit Bessel-funktion zusammenhängen. Math. Zeit. 165 (1979), 251-260
- [5] C. S. Davis: Rational approximations to e. J. Austral. Math. Soc. (Ser. A) 25(1978), 497-502
- [6] A. Durand: Note on rational approximations of the exponential function at rational points. Bull. Austral. Math. Soc. 14(1976), 449-455
- [7] A. Durand: Simultaneous Diophantine approximations and Hermite's method. Bull. Austral. Math. Soc. 21(1980), 463-470

- [8] W. B. Jones and W. J. Thron: Continued Fractions:
Annalytic Theory and Applications, Encyclopedia of Math.
Appl., vol. 11. Addison-Wesley, 1980
- [9] K. Mahler: On rational approximations of the exponential
function at rational points. Bull. Austral. Math. Soc.
10(1974), 325-335
- [10] K. Mahler: On a paper by A. Baker on the approximation of
rational powers of e. Acta Arith. 27(1975), 61-87
- [11] O. Perron: Die Lehre von den Kettenbrüchen. Chelsea,
New York, 1929
- [12] H. S. Wall: Analytic Theory of Continued Fractions.
Van Nostrand, New York, 1948